

沖縄、記憶が語り出す
——島クトゥバで語る戦世

Memories of Okinawa: Voice of the War Era in Shimakutuba



金城春子 / 1921 年生まれ / 沖縄県伊江村 (2005 年)

2026年度 立命館大学国際平和ミュージアムギャラリー企画展

11/6 [fri] - 11/28 [sat]

立命館大学国際平和ミュージアム 1 階 企画展示室

【開館時間】 9:30 - 16:30 (入場は 16:00 まで) 【休館日】 日曜日、祝日の翌日

【料金】 大人 400 円 (350 円)、中学生・高校生 300 円 (250 円)、小学生 200 円 (150 円)

※ () 内は 20 名以上の団体料金 ※ 立命館で学ぶ人・働く人は無料 ※ 関西文化の日 (11/14) は無料

※ 障害者手帳・被爆者健康手帳・戦傷病者手帳をお持ちの方は付添 1 名を含めて無料となります



立命館大学国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University

主催：「沖縄、記憶が語り出す」実行委員会

協力：琉球弧を記録する会、佐喜真美術館、証言映像アーカイブ研究会

後援：沖縄県、琉球新報、沖縄タイムス、NHK 沖縄放送局、琉球朝日放送、京都新聞、立命館大学国際平和ミュージアム

島クトゥバで語られた沖縄戦

《島クトゥバで語る戦世》は、写真家の比嘉康雄・比嘉豊光、郷土史家の村山友江、山城吉徳らによって結成された「琉球弧を記録する会」が、1997年から2008年にかけて沖縄各地で記録した、沖縄戦体験者たちの証言映像である。

琉球弧を記録する会は、1997年の発足直後より、沖縄戦体験者に戦時下の日常語で母語でもあった「島クトゥバ」で戦争体験を語ってもらい、その様子をビデオカメラに撮り続けてきた。かつては日本本土への同化のために「標準語（ヤマトグチ）」への矯正が強いられ、沖縄戦の最中には「間諜（スパイ）」の言葉とさえみなされた歴史をもつ「島クトゥバ」——琉球弧を記録する会は、沖縄戦体験者たちにあえてその生まれ育った「島（故郷）」の言葉で「戦世」を語ってもらうことで、その言葉と歴史を共有する間がらでしか語り得なかったであろう、沖縄戦の記憶をあざやかによみがえらせてきた。

《島クトゥバで語る戦世》は、沖縄戦の記憶を語られた言葉のみならず、それを語る人間の表情や声、身ぶり、そして沈黙の瞬間までもすべて記録しようとする〈映像〉の運動であり、また沖縄戦の記憶を「島クトゥバ」を聴き取ることのできない非体験者に向けて伝えなおそうとする〈翻訳〉の運動でもあった。琉球弧を記録する会がビデオカメラを回した800人を超える体験者のなかには、戦後50年を経て沖縄戦を初めて語ったという者も少なくなく、またそれが生涯で最後の証言となった者もいる。「沖縄が戦場となると、何が人びとの身に起きるのか」。《島クトゥバで語る戦世》に語られた無数の声は、いまなお誰かに聴き届けられることを待ち続けているはずだ。

本展では、これまで沖縄県外ではほとんど上映されてこなかった、琉球弧を記録する会の一連の映像作品を上映する（※）。上映作品としては、琉球弧を記録する会の結成のきっかけとなった《50年目の証言》（1997年）から、2003年の山形国際ドキュメンタリー映画祭に出品されて反響を呼んだ《島クトゥバで語る戦世》（2003年）、戦後60年企画「島クトゥバで語る戦世—500人の記憶—」（2005年）から生まれた《チビチリガマ・シムクガマの記憶》《糸満編》《南風原編》《やんばる編》《伊江島編》《愛楽園編》などの各作品、そして2026年にベルリンで公開された最新作《しまくとぅばで語る戦世——沖縄戦81年》まで約20作品を公開する。本展が、沖縄戦を生きた一人ひとりの記憶と向き合い、無数の声が聴き届けられる場となることを願っている。

※ 上映スケジュールは、立命館大学国際平和ミュージアムのホームページよりご確認ください。

上映トークイベント

第1回 「《島クトゥバで語る戦世》を思想化する」

11/21 [sat] 13:30- 比嘉豊光 × 遠藤水城

立命館大学国際平和ミュージアム 1階企画展示室

（写真家・琉球弧を記録する会）

（インディペンデントキュレーター）

第2回 「〈映像〉のなかの沖縄戦——記憶の身体化をめぐる」

11/28 [sat] 13:30- 福地リコ × 長谷川新

立命館大学国際平和ミュージアム 1階企画展示室

（映画制作者・ライター）

（インディペンデントキュレーター）

※ どなたでもご予約なしでご参加いただけます（先着30名まで）。

